

た「お前の忘れには困るなア、此以前中山詣りを仕た時に伊丹迄歸つてから、笠を忘れたと云ふて後戻りをした事がある、今なら船が出て間が無いから、船頭に頼んで船を附て貰ひ」イヤもうだんない「だんないと云ふて歸りになつたら無いようになるで」構へん「構へんて何を忘れたのや」小便するのんを「ナンや吃驚りしたがな阿呆やな」小便なら船から川の中へしたら宜へやないか「私は水を見ると病氣が起るね」ソリや云ふて遣れん水見て起る癩癩か「イ、ヤあこわや」あこわや「あこわてなんや」ア、恐「アコハや」何を云ふてるのんや、其れならなんで竹の筒を持つて乗らんのか「このまへ三十石に乗る時に竹の筒を持つて乗つてえらいめに逢た、皆小便が後戻りして隣りの人の辨當を濡して叱呵られた事があるね、竹の筒を持つて乗るのは懲りて居るね」おまへのこつちやよつて、先へ穴を明けずやろう「先ハ如才なう焼火箸で、大きな穴を抜いておいたんや」ソレに何で後戻りしたのや「考へると眞中の節が抜いてなかつたのや」ソんな男や、そこにある握り飯を包んである、竹の皮で樋にして仕なはれ「かまへんか、するで」デヨンデヨリン／＼ア、出る／＼。お咲さんとこの灰汁桶の口みたいに……すんだら竹の皮をほかそか「川で洗ふて日向へ干しておき、乾いたらまた使へるがな」乾いたらまた握り飯を包むか「そんな汚ない事が出来るかいなア……」清やん堤の上を見てみ、仰山人が通る、ア、賑やかなこつちやオ、チョツト、アレ……「コレ……チイト……だまつて居られんか、サウおまへのように喧しう喋べりなや」けども、だまつて居られん、だまつて居ると口へ蟲がわくのや「えらい難儀やなア、そんなんやつたら、堤の上を通る人と、喧嘩をしんかいな」イヤあかん、船と陸と喧嘩をしたら、船の方が負けや、堤から石を投げられても逃る事が出来ぬよつてに負けや」そん

な事を云ふさかいに、おまへは阿呆や、日本の三名所、三名物と云ふて「三名所三名物てなんや」讃岐のさやばしの行違ひ、京の祇園のおけら詣り、大阪の野崎詣りの喧嘩と云ふたら、口のけんかや、云ひ勝たら運が強い、云ひ負けたら運が弱い、運定めめの喧嘩、向ふ行て互に顔を見合して、さきほどは……イヨオ……で事が済むね、一つ運定めにやつてみイ「そんなら一つやつたら、こをつと待てよ何奴にしたろしらんて」コレ何を見て居るのや「なるだけ唇の厚さうな奴を擇つて居るね、唇の薄い奴は宜う喋るよつてに」コレそんなもんを探さない、誰でも宜いがな「よしや、コラー堤の上を通つて居る奴」コレ阿呆かいな皆堤の上を通つて居るがナ、どいつならどいつと云はねば、判らんがな「コラーどいつなら、どいつ」そうやない、私が宜い奴を教へてやるウ、向ふを見てみ、女に傘をさしかけて行く奴があるやろオ、あいつに云ふてやり「どないに云ふねん」嬉みたいな顔して傘を着せてるけども、嬉やあるまい、何處ぞの稽古屋のお師匠はん、野崎詣りをかこつつけに、引張り出して住の道あたりで酒しをでいたためて、後の胴空をボンと蹴たをそと思ふてけつかるが、祭りの太鼓で、ゾヨゾンちや、ペケレンスの阿呆よと云ふたり「それは誰が云ふねエ」おまへが云ふのやないか「ソラとても、よう云ふてやおまへんで」ナンや人事のように云ふてるなア、其んな事で喧嘩が出来るか、私がついて居るよつてに、大丈夫や云ふてやり「そらあかんで、彼岸のお茶の子の口上さへ、一週間かゝつたんや、そんなんやつたら、チョツと紙へ書いてんか」どないするね「向ふへ突出してお辭儀するは」新まいの乞食やがな、それくらい事が云へんか……私しが傍で云ふてやるさかいに、云ふてみイ「そんなら居てゝや、こゝら女に傘をさしかけて行く奴……」ハイ女に傘着せて居るのは、後